

定年退職者の方々を送る

ありがとうございました

私は東大理学部化学教室で教育を受け、38歳まで理学部の助手を務め、39歳で北海道大学講座担当助教授、翌年に教授になりました。8年間、北海道大学で分析化学講座を担当した後、母校に47歳で戻り、15年間分析化学講座（のちに分析化学研究室）の教授を務めました。本年、定年を迎えることになり、光陰矢の如しということを感じ、感慨ひとしおです。この間、東京大学および北海道大学の先輩・同僚の教授、教室の方々にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

<歴史のひとこま>

東京文京区の教育大附属高校から、私は「知」の研鑽へのスタートを切ったと思っています。60年安保の年で、樺美

梅澤 喜夫（化学専攻 教授）

智子さんが亡くなった時、われわれ高校生さえ国会前にデモに行った記憶があります。

駒場から本郷への、いわゆる4学期の試験休みの間に東京五輪がありました。千駄ヶ谷の国立競技場の開会式にいました。ぬけるような美しい日本晴れでした。1964年の秋のことです。

安田講堂に機動隊が入った翌日、中に入ってみるとまだ催涙ガスが目にしみていました。修士2年1月のことでした。

<分析化学の研究・教育>

「見えないものを見えるようにする。測れないものを測れるようにする方法の研究」を行いました。北大、東大教授の間に課程博士修了者を34名ほど出しました。この2つの大学の大学院担当者



であれば、これぐらいは責任なのかもしれないと思っています。

北大で「分析化学」の講義を担当したときの内容をもとに、東大に戻ってから「分析化学」（岩波書店）の教科書を執筆し、駒場4学期の理学部講義「分析化学I（総論）」、化学科の「分析化学II」の講義で用いました。他にも数冊の分析化学関連の本を著わしました。

ここに筆を置くにあたり、東京大学の理学系化学専攻および他の専攻の先生方のご健勝と、研究・教育での益々のご貢献ご発展をお祈り申し上げます。

梅澤喜夫先生を送る

西原 寛（化学専攻 教授）

梅澤先生に初めてお会いしたのは30年前でした。当時、梅澤先生は本学部の助手で私は化学科に進学したばかり。学生実験を指導してくださる姿には、新進気鋭の若き研究者のイメージに泰然とした風格と存在感をすでに備えられていました。梅澤先生は分析化学の中でも電気化学を専門とされ、シンシナティー大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校、ブタベスト工科大学、オハイオ州立大学に留学された後、1984年に北海道大学助教授（講座

担当で翌年には教授にご昇任）に着任され、1992年、教授として本学に戻られました。それ以来15年間、伝統ある分析化学研究室の継承者として世界の分析化学を先導し、先駆的な研究を続けられました。とくに最近、生体分析化学へ大きく研究を展開され、細胞情報伝達の分子過程を認識して、その場で蛍光・発光の光信号へ変換して出力するさまざまな光プローブを体系的に研究されていることは特筆に値します。これらの成果を含む「イオン・分子の可視化と検出のための新手法」のご業績により、2006年度には日本化学会賞をご受賞されました。

梅澤先生は、たいへん味わい深いコメントをされます。あまりにも本質的

で一瞬、戸惑うことがあります。出張から帰った直後にお会いすると、「そんなに歩いていると、研究ができなくなるでしょう」。研究にとって、そして研究室学生の教育にとって何が大事かということを常に思いやり、実践されてきました。教授デスクの周りには今でもパソコンがありません。新しい研究のアイデアを創り、重要な論文や本を書くのが研究グループの長のやるべきことであるというのがご持論のようです。実際にこのような研究室運営によって多くの優秀な若手研究者を育てられました。多大な足跡を残されてこられた梅澤先生には、ご退職後もなお一層のご活躍を祈念するとともに、変わらぬご鞭撻を賜りたく思う次第です。

地球惑星科学のまとまりをめざして

濱野 洋三 (地球惑星科学専攻 教授)



確か 1989 年に理学部に着任したと思
いますので、まったく実感がないうままに
17 年がたってしまいました。本当に、あつ
という間に過ぎ去ったという感じです。
この間、地球科学に関わる全国的な研究
プロジェクトである、地球中心核、全地
球史解読計画、海半球ネットワーク、継
続中の特定領域研究「スタグナントスラ
ブ」等に参加して、新しい課題に取り組
むことができ、楽しくまた実り多く過ご
させて頂きました。周囲の皆様方の御理
解、御協力のたまものと、たいへん感謝
しております。

私が理学系研究科地球物理学専攻の大
学院生だった 1967 年から 1972 年頃は、
地球科学、惑星科学にとっての転換期で
した。この頃プレートテクトニクスの考
え方がほぼ定着し、地球物理学と地質学
の垣根が低くなりつつありました。また
アポロによる月探査に代表される惑星探
査により、地球科学の手法が惑星研究に
適用できることがわかり、地球科学の対
象領域が惑星や惑星間空間に広がって
いきました。さらに地震の発生については、
ダイラタンシー理論により、地震の発生

を予測することが、すぐにも可能ではな
いかという憶測も生まれていました。こ
の時期以降、地球科学は地球惑星科学へ
発展し、さらに防災、環境など、人間生
活に密接に関わる側面にも拡大してきま
した。最初に述べたプロジェクト、もこ
のような地球惑星科学の進展に対応して
生まれたものでした。

いっぽう、教育・研究組織はすぐに新
しい体制になることは難しく、着任し
たころの理学部・理学系研究科の組織
は、大学院時代とほとんど変わってませ
んでした。しかし、私が着任した頃、地
球物理学の改組の検討が始まり、すぐ
に地球惑星物理学が誕生しました。さら
に新領域創成科学研究科の創設に関わ
る理学系研究科の取り組みをきっかけと
した話し合いにより、2000 年には地球
科学に関わる地質学、鉱物学、地理学そ
して地球惑星物理学の 4 専攻が合同し
て、地球惑星科学専攻が誕生しました。
このような学問の動きに対応する自発的
な改組に加えて、大学院重点化、法人化
等の上からの改革が加わったために、専
攻としては停滞が許されない本当に忙し

い時期でした。日本全体の地球惑星科学
コミュニティについても、地球科学や
惑星科学に関わる学会はひじょうに多く、
国や社会に対して地球惑星科学としてま
とまった対応が困難な状況でしたが、地
球惑星科学専攻設立の考え方の延長とし
て、専攻として努力することによって、
2005 年に 46 学協会が参加した日本地
球惑星科学連合を発足させることができ
ました。最後になりますが、1995 年 1
月に起こった兵庫県南部地震には本当に
ショックを受けました。しかし、この地震
を契機として、地震に関わる研究者の有
志の会でのさまざまな議論の末に、ボト
ムアップで地震予知研究に関わる新しい
計画が動き出し、順調に進展しているこ
とは、この大きな人的災害をもたらした
地震のプラスの側面といえると思います。

濱野先生を送る

阿部 豊 (地球惑星科学専攻 助教授)

濱野先生は地球電磁気学を中心として
固体地球物理学のひじょうに広い範囲を
カバーされ、理論・実験・観測のすべて
の面から研究を進めてこられました。言
葉で書くとひじょうに短くなってしま
いますが、これは実にたいへんなことです。
先生のホームページには大学院入学志願
者に向けて「まず必要なのは『研究のた
めには手段を選ばない』という態度とい
うか精神であろう。」と書かれています
が、それを精神のレベルにとどまらず、
実践できる数少ない方です。

私には濱野先生の多分野にわたる御業
績を的確に紹介することはとてもできま
せん。しかし従来、独立に発展してきた
地球科学諸分野の枠組みにとらわれずに、
「まるごと」の地球や惑星を理解するこ
とが先生の目指すところであり、それが
多様な研究課題・研究手段を生んだのだ
と思います。それは研究のみならず、地
球惑星システム科学講座の創設や、日本
地球惑星科学連合の設立といった面での
お仕事にも表れています。

濱野先生の部屋はいつも扉が開かれて
いて、学生・院生・教員のだれでもが伺
えば、研究上のことであればもちろん、
パソコンの機種選定といった些細なこと
(先生はいつでもどこで仕入れられるか、パ

ソコン等の新製品にお詳しく、発売とほ
ぼ同時にいろいろな情報をご存じです)
であっても、必ず仕事の手を止めて相談
に乗って下さいました。このことに助
けられたものは私を含めてひじょうに多
数に上ると思いますが、些細なことで先
生の時間を浪費してしまったはずでもあ
り、申し訳ないことです。

地球惑星科学の総合、という言葉が唱
えられて久しいですが、まだまだ濱野先
生のような総合的地球惑星科学者はほと
んどいないのが現状です。今後、総合的
に地球や惑星を研究できる若手を育て
ていくことが、われわれ後進が濱野先生に
ご恩返しする道だろうと考えています。
長い間、どうもありがとうございました。

初心忘るべからず、 そして、若者が夢を持てる環境を

和達 三樹 (物理学専攻 教授)



1967年に物理学を卒業しました。米国ニューヨーク州立大学で博士号を取得の後、東京教育大学光学研究所、筑波大学理工学系、東京大学教養学部在籍し、1990年に物理学教室に移りました。それ以来17年間、東大理学部の一員として充実した日々を送ることができました。たいへん幸せな気持ちで退職を迎えつつあります。この間、物理学教室の先輩、同僚、理学部や物理学教室の事務の方々からいただいたご支援、ご助力に心より感謝いたします。

私の専門分野は物性基礎論・統計力学です。急速に発展する学問分野において、微力ではありますが、それなりの貢献ができたと考えます。付置研究所、基礎工学部、教養学部、理学部と大学の多彩な組織と運営を経験できたことは、視野を広げることにたいへん役立ちました。東大の欠けている所や直したほうが良い所

は、外部にいたほうが適確に見ることができます。世の中には広く多様な考え方が存在します。自分の近傍との比較にエネルギーを費やすのではなく、より高い視点で努力したいと感じていました。

子供のときに読んだパストゥール、ファラデー、メンデルたちにあこがれ、自然と理学部に進学しました。その学科は物理学でなくてもよかったのかもしれませんが。そのような私にとって、専門分野がますます狭くなり、同じ学科でさえも分野によって時として反発しあう様子を理解することはできませんでした。重要なのは、創造力あふれる発見を目指して忍耐強く研究を行うこと、そして、自分を追い抜いていく人材を育成することです。獲得した研究資金や研究員の多さが重視される傾向が、これからも続くのであれば、基礎的課題を追求する理学部の本質も大きく変わってしまうでしょう。

現在、東京大学は国際的にトップレベルにあります。強調するまでもなく、理学部は大学内でエリート学部であり、きわめて多くの優秀な学生が進学してくれています。この状況が少し変わりつつあることを憂慮しています。教員も自分が理学部に進学した初心を忘れることなく、自然科学に対する謙虚さを持ち続けてください。そして、優秀な学生たちをさらに向上させる環境づくりを行い、将来のわが国を担う研究者・教育者をこれまで以上に輩出されるようお願いいたします。

和達三樹先生を送る

宮下 精二 (物理学専攻 教授)

和達三樹先生は、非線形波動、可解モデルなど、数理物理の研究を推進され、理論物理学、とくに数理物理・統計物理学において世界をリードされています。非線形波動では「ソリトン」の黎明期から可積分系への分野の広がりの中で指導的な役割を果たされ、その業績により日本IBM科学賞、仁科記念賞、さらには紫綬褒章をお受けになっています。昨年11月に開かれた21世紀COEシンポジウム「非線形物理学」の総括でも、北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」を取り上げそこに現れている非線形波動をおもしろく解説されたいへん好評でした。

和達先生は、ひじょうに数学的な非線形物理学をもとに、多くの物理現象を対象として、その中に数理物理学の出番をしっかりと見つけていくというスタイルを

おもちと思えます。結晶成長のモデルや最近のレーザー冷却によるボーズ・アインシュタイン凝縮(BEC)での可解モデルの役割にもいち早く注目し、すばらしい成果を上げられています。また、ランダム行列、結び目理論、量子情報などでも、多彩なお弟子さん達による和達学派がひじょうに活躍しています。

和達先生の経歴は多彩で、東京都立日比谷高等学校から東大という、当時のセレブコースにのって本理学部物理学に進学されましたが、大学院は渡米しニューヨーク州立大学の石原明先生のもとでわずか2年でPhDを取得されました。その後、東京教育大学光学研究所に移られ、戸田盛和先生と多くの共同研究を行われています。その間、カナダ国アルバータ大学客員研究員として高橋康先生、梅沢博臣先生等との量子場の研究などを進められました。1978年に筑波大学理工学系、1980年に本学教養学部に移られ、1990年に理学部教授に就任

され、総長補佐、専攻長・学科長、評議員、副研究科長など理学部のためにご尽力されてきました。まさに今、話題になっているキャリアの流動性を見本といえるのではないのでしょうか。そのためか、4年生で和達研配属になった学生が外国の大学院をめざす例がいくつもありません。

和達先生は、学内のみならず、日本物理学会理事、日本物理学会会長、日本学術会議連携会員、仁科記念財団理事はじめ多くの学術的な組織でご活躍です。和達先生の授業はたいへん丁寧で、また風貌がアインシュタインにひじょうによく似ていらっしゃることも（？）学生にもたいへん好評でした。和達先生はいつも周りを明るくすべく努力されており、いわゆる「親父ギャグ？」はご存じの方も多いかと思えます。その点に関する学生の評価はどうか、ニュートン祭委員会に依頼してみたいと思っています。先生のこれからのますますのご活躍を期待しています。

退職にあたって

奈良坂 紘一（化学専攻 教授）

1973年4月に助手として着任して以来、34年間、理学部・理学系研究科にお世話になりました。この間、着任当時の状況からは想像できない変革があり、最近ではついていくのもおぼつかない状況なので、やはり退職の時期であるかと痛感しています。

定年にあたり、最近とくに心配になっていることをひとつ述べさせていただきます。学部講義で専門科目を教える際に、米国の教科書の日本語訳がよく使われています。自分の専門は化学（有機化学）ですが、2年生に初めて有機化学の講義をする際、もっとも丁寧に書かれていると思われるテキストの翻訳本を使っています。これは、米国では化学科学生対象の教科書ではなく、医学部まで含めた科学全領域の学生を相手とする一般的な有機化学の教科書です。しかし、まず出発時点から学生と教科書のレベルに、大きなギャップがあることに気づきました。それ以来、できるだけ丁寧に講義してきたつもりです。しかし、この差が勉強意欲の違いだけとは思えず、どこからこのような差が生じているのか不思議に思い、米国の友人に頼んで代表的な高校の教科書を送ってもらいました。それを見て、高校用ではなく大学の一般化学の

教科書の間違いではないかと聞き直したほど、わが国の高校教科書とは次元の違うものでした。写真をご覧になるとわかりますが、紙面の大きさやページ数はもとより、その内容たるや雲泥の差があります。たとえば、分子軌道論の章があり、s, p, d 混成軌道、結合性・反結合性軌道まで説明されています。それに対してわが国の教科書では、軌道の概念はおろか、エチレンなどの二重結合も2つの線で表されているだけです。おそらく有機化学だけでなく、多くの専門分野で同じことが起きているのだと思います。

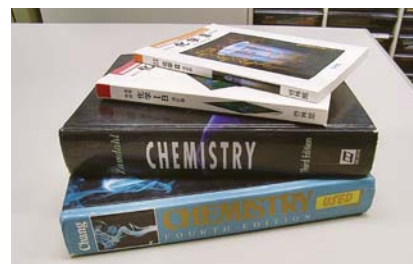
まず大学人は早急に現在の高校教育を把握した上で、ギャップを埋めるようなことから始めて、丁寧に教えるよう改めることが必要でしょう。しかし、これだけでは教育の立ち直りは不可能で、同時に幼稚園から始まる教育の現状を正確に分析して、教育レベルを改善しボトムアップを図らないと、世界から取り残されてしまう日が来るのではと心配しています。

研究室にさまざまな国から留学生が加わってくれ、フランスやカナダの学部生らはしよっぱなから本学修士学生と対等に実験や議論ができましたが、これは大学までに培ったレベルの上に、高くても広い領域の教育内容をマ



スターできる余裕があるためだと思います。自分も含めて日本人は広い知識がないと言われますが、教養が重んじられる文化の違いによるところが大きい気がしています。日本の教育指針や環境が再検討され、よい方向に向かうことを期待しています。

末筆ながら、34年間の長い間、理学系研究科とくに化学専攻の方々には、たいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。



■ 上は日本、下は米国の高校教科書

奈良坂紘一先生を送る

市川 淳士（化学専攻 助教授）

奈良坂紘一先生は、1973年に本学理学部の助手に着任されて以来、講師・助教授を経て1987年からは教授として、34年の長きにわたり本学内外に多大な貢献をされました。有機合成化学は、医薬品や材料化学など物質科学の基盤を支えています。それゆえ困難な物質変換を可能とする革新的な合成反応の開拓が絶えず求められる分野です。その中であって奈良坂紘一先生は、斬新な発想のもとに独創的な合成反応を次々と発表され、常に先導的な役割を果たしてこれ

ました。

たとえば、ルイス酸を利用する炭素-炭素結合生成反応を確立され、塩基性条件下で行われていた炭素骨格形成が酸性条件下でも制御できることを世界に先駆けて示されました。また、キラルなルイス酸触媒を用いる不斉炭素骨格形成法を開発され、今日、隆盛を誇るこれらの化学の端緒を開かれました。さらに、従来進行しないとされていた sp^2 原子上での S_N2 反応を達成され、有機化学のこれまでの考え方を一変する新しい可能性を示されました。

奈良坂先生のお仕事振りから受ける印象は、「鋭い洞察」と「素早い決断」です。この二つを手に、研究では反応の本質をつかんで的確な方針を打ち出され、数々

の成果を挙げるとともに、多くの後進を育てられました。こうした研究・教育はもとより、学会・大学運営のさまざまな場面でも難題を涼やかに解決してこられました。日本化学会では速報誌の編集委員長として、今は常識となった電子化を強力に推進されました。

海外にも親交の深い研究者が多い奈良坂先生は、各国との国際交流にご尽力され、とくに本学と仏国ルイ・パスツール大学との学術交流協定では締結当時から長らくお世話いただきました。4月からはシンガポールの国立大学より請われて拠点を海外に移し、研究・教育を継続されるご予定です。北緯1度の新天地にて、さらなる研究のご発展とご活躍をお祈りいたします。

17年を振り返って

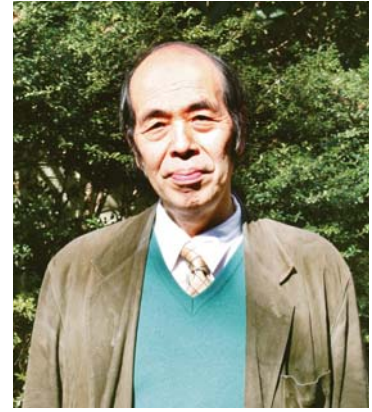
長田 敏行 (生物科学専攻 教授)

私は、本研究科に17年間お世話になりました。それ以前に三機関に勤務しましたが、それはいずれも5年前後でしたので、本研究科の在籍に比して、それらを通算しても及びません。にもかかわらず、たいへん短いように感じておりますが、その理由を考えるに、本研究科では常に新鮮な変化があり、ままた多忙ではあっても、たいへん充実していたためであると思ひ起こしております。

研究の方は、一貫して“植物細胞の分化の全能性”に関わってきましたが、本研究科では、樹立したタバコBY-2の細胞培養系が、現在でも世界でもっとも増殖速度が速く、細胞周期の高度同調系が可能な唯一の系ということで、世界に広まり、私の確認できている限りでも世界32カ国に広がっております。2004年にはそれを主題にした国際シンポジウムが開かれ、2004年と2006年にはシュプリンガー (Springer) 社より二冊のモノグラフが出版されるという幸運に恵まれました。

いっぽう、私にとって思いがけない展開は、附属植物園長として生物科学専攻教員としては異例にも8年間勤務したことでした。植物園には多方面の方々が興味を持たれておりますので、それらに何とか応えたいと若干の努力はしたつもりです。とくに、イチヨウ精子発見の100年を祝う場にめぐりあわせたことで、明治になって日本が世界に門戸を開いて最初の大発見の経緯を調べる機会がありました。その結果、研究とは長い時間の中で考えるものであるという思いを深くしたのは、その中での大きな収穫でした。植物園の業務に関わったことで生物の多様性にも興味が広がり、水生植物の異型葉形成、南アフリカを原産地とする茎頂分裂組織を介さずに茎葉を形成する植物にも研究対象が広がりました。

また忘れがたいのは、1980年代は北米と関連が深かったのですが、1990年以降もっぱらヨーロッパの研究者との関わりが深まりました。とくに、すでに故人となったジェフ・シェル (Jeff Schell)



教授 (マックスプランク育種学研究所) との親交は忘れがたいものです。フンボルト研究賞に推薦くださった経緯は私も承知しておりましたが、その後、EMBO (ヨーロッパ分子生物学研究機構) のアソシエートメンバーにも推挙くださったようで、選出の突然の連絡はただ驚きでした。それがたいへん名誉であることを知ったのは大分、時間が経過してからでした。この関わりで、プラハ、アイルランド、オスロ、ワルシャワにも滞在することができたことは、世界を知りたいという私の密かな願望に大いに答えてくれるものでした。

最後に、私に自由に振舞わせてくださった同僚の方々、研究室に所属された方々にお礼を申して別離の弁としたいと思います。

抜群の潜在性発見能力

- 長田敏行教授のご退職にあたって -

川口 正代司 (生物科学専攻 助教授)

植物の葉をある酵素で処理すると、丸い裸の単細胞プロトプラストを得ることができます。建部ととともに、世界で初めてタバコプロトプラストから植物個体を再生させた人が長田教授です。プロトプラストはこの星に初めて生まれたような始原的な姿をしており、それを増殖・分化させて個体を作り出しました。ここに植物の優れた分化全能性を見ることができますが、同時にプロトプラストの核酸を透過しやすい性質は、その後の植物バイオテクノロジーの発展に多大な貢献

をすることになりました。

次に長田教授は、きわめて早く増殖するタバコ培養細胞の存在を知り関心をおもちになりました。そしてそれが将来、細胞生物学の優れた材料になることを予見し、国内外にいち早く広められました。それは今日、タバコBY-2として、もっとも広く使われる植物培養細胞となっています。

長田教授の研究以外のもうひとつの重要な功績は文化交流です。日本のみならず諸外国の文化や歴史にたいへん精通し、かつ知人が多いことから、本学の植物園園長として計8年にわたり、文化交流を図られました。

昨年秋、研究室のメンバーが信州大に就職したこともあり、教授の生まれ

育った諏訪を訪れました。そこには、御柱、間欠泉、片倉館など、独特の文化や自然を見ることができました。片倉館は1928年に諏訪湖畔に建設された温泉大浴場であり、創建者は片倉財閥の2代目、兼太郎です。館内に入ると、欧米諸国の文化の豊かさを知り、諏訪の地に独特の文化交流施設を建設した兼太郎の肖像画が飾られていました。兼太郎の目のあたりが、長田教授のそれに重なり、同じ志をもつ人が植物学の世界で現れたと思いました。36年の時を隔てて、今なお長田・建部のプロトプラストからの個体再生は語り継がれています。時流に流されず最後まで独自性を貫いたその姿勢に、心からの拍手を贈りたいと思います。

定年退職にあたって

西郷 薫 (生物化学専攻 教授)

私が東京大学理学部に赴任したのは1988年の春だったので、20年近くも理学部・理学系研究科にお世話になりました。それ以前は、長くても7～8年で居場所を変えておりましたので、ずいぶん長居をさせていただいたとの印象はぬぐえません。退職に当たり、まずもって、この間にさまざまな形でお世話になった理学系研究科や他研究科の先輩や同僚の先生方、本部事務・教室事務職員の方々、また私の研究室に在籍し、さまざまな共同研究をエネルギーにすすめてくれた学生諸君に、心から感謝いたしたく思います。皆様のお陰で、たいへん有意義で充実した日々を過ごすことができました。

私が研究を始めたのは今から40年程前で、現在の研究の拠点でもある理学部3号館でした。当時は、まだ分子生物学の重要性は、必ずしも十分に認識されておらず、実際、私自身、生命科学にはじめから強い興味をもっていたにもかかわらず、今なら子供でも知っているDNAなるものの存在すら、本学に入学するま

では知りませんでした。その後、分子生物学は大きく発展し、生命科学をポストゲノム時代といわれる時代にまで導いてきました。私自身の研究も、それに引きずられるように、大腸菌に感染するウイルスの研究から、ショウジョウバエを用いた発生分化の基本分子メカニズムの解明、さらには、ヒト遺伝子機能解析の基本的手法の開発へと大きく変わってきました。しかし、やっと研究者を目指した頃の目標である、ヒトの分子的理解のための、(一般的)方法論になんとか到達できたというところで、人生の第一章の終了を迎えることになりました。第二章でさらなる発展をという考えもありましたが、やはり科学は若い人のものだと思いますので、この際、思い切って気持ちを切り換え、人生の第二章は、今までの研究とはいささか異なった、新たなチャレンジの場とするのも面白いのではないかと考えています。

私の在職した20年間に、大学を巡る環境は、大学院重点化、柏キャンパス問題、



法人化等、めまぐるしく変わったと思います。しかし、個人的にはやはり、佐藤、岡村、岩澤先生といった歴代の研究科長や、各専攻のご協力のもとで、生物情報科学教育を理学部教育に導入、定着できたことが、もっとも印象的な出来事でした。もちろん、このような教育研究領域の重要さは、そこに参加された人たちの今後の努力に大いに依存していると思いますが、新学科の創設は、東京大学理学部が時代の変化に対応する柔軟性をもった組織であることを社会に示すことができた点で、大いに意義があったのではないかと考えています。今後の理学部・理学系研究科の発展をお祈りいたします。

西郷薫先生を送る

- 生物情報科学科に至るチャレンジ精神 -

程 久美子 (生物化学専攻 助教授)

西郷薫先生は、1988年に九州大学から母校の東大・理学部に移られました。これを機に、ショウジョウバエの“動く遺伝子”の研究からショウジョウバエの分子発生生物学の研究へと分野を拡大され、ここ数年はRNA干渉という新たに登場した、しかし、普遍的な生命現象に取り組み、対象とする生物種もショウジョウバエからヒトにまで広げた研究が行われました。西郷先生の研究は、常に遺伝子とその機能を念頭に、分子生物学が拓いた分野の中心に位置するものです。最近のRNA干渉の研究については、1998年に発見、2006年にはノーベル医学生理学賞の対象となったこの現象にいち早く着目された先駆的な研究をな

され、たとえば、“アールエヌエー干渉”という日本語はおそらく西郷先生が最初に使われたのではないかと記憶しております。私自身、1999年から西郷先生とRNA干渉に関する共同研究をさせていただきましたが、今日まで常に感じてきたことは、西郷先生のデータ評価の慎重かつ緻密さ、そしてサイエンスにおける厳格さでした。こうした緻密さと厳しさの中から、西郷研究室出身の優れた研究者が数多く輩出しております。

西郷先生は、新しいことに対して積極的にチャレンジされる方です。これは研究に対してのみならず、他の事業、たとえば、新しい学科を設置するという尻込みしそうな研究以外の目標に対しても発揮され、かつ、それらを実現される方です。2001年には、生物情報科学科の設立を目指した、文部科学省振興調整費による「生物情報科学学部教育特別プログラム」をリーダーの一人として立ち上げ

られ、その運営にもご尽力くださいました。そして、この事業は、本学部に正式な新学科がこの4月に設立されるに至っております。きわめて残念なことに新学科が設立されるのは西郷先生のご退職後ですが、種を蒔いたあとは後進の者が育てる、という西郷先生らしい声が聞こえるような気がいたします。今後の新学科の設立と運営には多くの困難が伴うと予想されますが、私たちは後進の者として、西郷先生の近くで学ばせていただいたことを生かし、来たる東京大学理学部・生物情報科学科を生物情報科学研究の世界的拠点とするのが務めであろうと思っております。

西郷先生には、今後もさらなるご活躍を私たちに見本として示してくださるものと当てにさせていただいておりますが、理学系研究科・理学部における一区切りとしてここに御礼を申し上げさせていただきます。

36年間を振り返って

仙田 實 (生物化学専攻 事務室係長)

私が東京大学に採用されましたのは、1970年8月でした。36年間の公務員生活がはじまり、最後2年間は理学部でした。時がたつのが早すぎてあっという間の2年間でした。

本郷(理学部を含む)に11年、駒場Ⅱに20年、駒場Ⅰに2年、田無に3年の計36年間で東大一筋に過ごしました。

宇宙航空研究所の施設掛から始まり、境界領域研究施設において用度掛を担当、とても広い敷地の管理・物品の照合(台帳と物品合わせ)のため、ほとんど外廻りか研究室周りをしておりました。

工学部計数工学科では学部学生の教務関係を担当。田無(農場)では、学生実習で生産したトマト・キュウリ・ナス等の野菜を市場に運んだり、収穫した米を農協また東大生協に売り払いをしたりしたこともありました。蘭(胡蝶蘭・オンシジウム)も人気があり、多くの人達に買っていただきました。

大型計算機センターにおいては、建築・電気・設備の予定価格・仕様書の作成を

し、作成資料をもって本部(施設部)に確認・訂正を受けに行く毎日でした。

家畜病院においては、毎日の現金収入(100万~200万円)を手計算でしていましたので、200万円位の金額になると1度で計算が合わず、計算が終了するまでに時間がかかったことを思い出します。

教養学部教務課では、非常勤講師の交通費・日当の支給に携わる仕事をいたしました。出勤簿に押し印がない場合、各先生に確認の電話を何回もかけた経験もいたしました。

また、各教室管理も担当いたしました。授業中にマイク・パソコン・映写機等が故障し修理を要請されたこともありました。

生産技術研究センターにおいては、試作工場の製作料金の内部移算手続きを行ないました。

そして、理学部においては、生物化学専攻事務室における総括としての仕事を行ないました。

以上、36年間にわたって行なった私



の仕事を簡単にまとめてみました。振り返ってみますと、かならずよき先輩、同僚が側に居てくれましたので、仕事のこと、困ったり、悩んだりしたときは、助けてもらいました。話し合いをずいぶんしたように思います。また、けんかもしました。また、酒をのみながらくだらな話も幾度となくしました。

皆様からいただいたご恩をお返しできないのは心苦しいですが、無事、健康で、定年を迎えられたことを心より嬉しく、どの職場でも楽しく過ごせたことを皆様に感謝いたします。

本当にありがとうございました。

この他にも3名の方が定年退職されます。

岸 美枝子(地球惑星科学専攻 主任), 樫村 圭造(物理学専攻 技術専門員), 櫻井 敬子(天文学専攻 技術職員) 長い間、理学系研究科・理学部にご尽力いただき、ありがとうございました。今後のご健勝をお祈りいたします。

人事異動報告

所属	職名	氏名	異動年月日	異動事項	備考
事務	専門員	中村 次郎	2006.12.4	死亡	
生科	助手	堀川 一樹	2006.12.9	辞職	北海道大学電子科学研究所特任助教授へ
化学	助手	縫田 知宏	2006.12.16	採用	
物理	教授	桑島 邦博	2006.12.31	辞職	自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授へ
化学	助教授	柴藤 貴文	2006.12.31	辞職	
生科	助手	東山 哲也	2006.12.31	辞職	名古屋大学大学院理学研究科教授へ
物理	助手	平原 徹	2007.1.1	採用	
物理	助手	渡利 泰山	2007.1.1	採用	
原子核	助手	岩崎 弘典	2007.1.1	研修出向	~2008.5.31
事務	一般職員	河合 哲史	2007.2.1	配置換	研究支援・外部資金チームへ